109 學年度第一學期 Eurasia 基金會國際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」（２）

議題：台日知識人の台湾への眼差し及びその文芸的所産（1895-1945）

Eurasia 基金会国際講座の第 5 回は、楊智景中正大学台湾文学與創意應用研究所所長を招いて行われた。まず徐興慶学長から次の質問があった。「在台日本人の文学作品、あるいは楊逵のような台湾人の日本語作品は台湾文学になるのか日本文学になるのか」と。楊教授は日本時代の島田謹二がかつて提示した「外地文学」という概念を例にこの問いに答えた。楊教授自身の考えでは、新歴史主義であろうとポストモダニズムの観点から見ようと、そうした作家の台湾書物は日本文学を豊かにするものであった。

楊教授は 1895 年から 1945 年の 50 年間を四期に分けて紹介した。

１．領台前期（1895-1916）

各種の調査活動が行われ、探険記、ルポルタージュ、冒険小説などの文芸作品が生み出された。『太陽』『東京日日新聞』等の雑誌メディアの伝播により、台湾は二項対立的に叙述されていった。すなわち野蛮、未開化、不潔などの字句を繰り返し使った台湾の後進性の強調、対する日本の文明や進歩である。それによって新領土のイメージが文芸作品を通して日本内地に伝播された。村井弦齋の『日の出島　新高の巻』はその例である。

２．殖民地観光発展期（1916-1930）

発展の背景には次のものがある：

（1）交通の完備：台湾縦貫鉄道開通（1908 年）、内台定期航路確立（1912 年）

（2）旅行機関の設立：JTB 台北支部開設（1914 年）

（3）有効な宣伝活動：20 周年記念台湾勧業共進会（1915 年）

（4）旅行環境の整備：東宮皇太子の台湾行幸（1923 年）

旅行の三タイプ

（1）個人旅行（佐藤春夫の台湾旅行）

佐藤春夫は日本人作家の来台のさきがけとなった。大正 9 年 6 月から 10 月初旬までの三か月半の旅は「蝗の大旅行」、「鷹爪花」、「女誡扇綺譚」、「殖民地の旅」などの作品に記された。佐藤春夫の「眼差し」はステージとバックステージに向けるもので分けられる。ステージは当局が彼に見てもらいたい方面、たと

えば発電所建設、同化教育の現場等の参観に向けられた。バックステージは彼自身のやり方で越境的概念を実現しようとして、原住民の生活風景、伝統的生活と資本主義の衝突現場などに向けられた。佐藤の「眼差し」もまた重層的な意義を持っており、受動的な旅行者でありながら、意識的に思考空間を確保しようとする観察者でもあった。

（2）殖民地視察旅行（徳富蘇峰の台湾旅行）

蘇峰は明治維新後の重要な政治学者である。1929 年当局に招かれ来台し、日本統治の功績を体験した。すなわち、蘇峰一行の観光日程は意図的に組まれたもので、蘇峰の『台湾遊記』を読むと、時に俯瞰的、時にパノラマ的な「眼差し」を特徴とする。旅行行程は帝国の印が刻まれた巡礼という政治性を帯びている。

（3）文化宣伝旅行（婦人文化講演会）

毎日新聞社などが主催して、1930 年に盛んに行われた。メディアに大々的に宣伝されていたとはいえ、言論制限、行動監視も受けていた。その文芸作品には林芙美子の「植民地で会った女」、北村兼子の「新台湾行進曲」などがある。日本の女性作家の台湾書物は男性作家を主とする台湾観の欠落を埋めている。

楊教授はまたここで台湾知識人の自我への眼差しと比較した。教授の考えでは、蒋渭水、頼和は植民統治を批判し、植民による台湾の現代化を通して自己省察を行なった。それ以外に、教授は陳澄波を例に挙げた。例えば、彼の画いた「水源地付近」の町には現代的な施設がある。彼の絵には現代性を示す多くの記号があり、殖民政府当局と類似した尊大な治績観がうかがえる。しかし、彼と日本人の他者観の違いは、彼が憧れる現代性には台湾の伝統が溶けこんでおり、台湾を主体にして、台湾の進歩を促進することができるということにある。これが他者観と自我観の大きな差異である。

３．「霧社事件」以後（1930-1937）

「霧社事件」後、「蕃婦問題」に啓発され、原住民女性と山地の日本人警察官の関係について考えた作家たちがいる。例えば大鹿卓、中村地平である。他に伊藤永之介『平地蕃人』（1930 年 12 月）、田村泰次郎『日月潭工事』（1934 年 8 月）があり、労働問題、搾取の観点から台湾の状況を見た。

４．戦時下（1937-1945）

この時期は主に宣伝旅行が意図的に動員された。「文芸銃後運動講演会」（1940 年）は菊池寛をリーダーとする内地作家によって組織された。メンバーの訪台記録あるいはメディアへの発言から、彼らが台湾を日本の南進政策上の中継点と見

なしていたことがわかる。丹羽文雄「台湾の息吹」、佐多稲子「台湾の旅」は特に高砂義勇隊の忠誠勇猛なイメージおよび志願兵の忠誠心に焦点をあてており、かつては「野蛮未開」の民の汚名を着せられた原住民が戦時下に賛美の対象になっている。その他、台湾の皇民化運動の成果も、当時訪台した作家たちの観点のポイントである。

(Web サイト:https://Eurasia.pccu.edu.tw/faculty.php)

(原稿:陳毓敏・日文系副教授)

(日本語訳:塚本善也・日文系副教授)